

春になると橋の下には何匹も猫が捨てられる。その猫たちのほとんどが「冬を越せずにその小さな命の火を消すという。彼はその猫たちを放っておかず、20年近く捨て猫の世話をしていた。家は橋の下。いわゆるホームレスだ。雨の日も、嵐の日も、雪の日も、酷暑の日も、空を飛び回りお金を得る。そのほとんどを猫のエサ代に使っていたという。その一方で図書館に通って勉強をするという姿もあった。彼がそれ以上どんな人生を歩いてきたのかは分からない。心優しい彼の名は三度地哲哉さん81歳。3月25日、その温かい命は、心なき冷徹な事件の末、この世からその火を消した。大学生を含む5人の若者たちが、逃げる三度地さんを数百メートルにわたって追い回した上で、石を投げつけるなどの暴行を加えて、頭に致命傷を負わせて殺害したという。以前にも同じようなことがあったとニュースは言っていたが、その若者たちは大学生にまでなってきた。今まで何を学んできたのかと聞いた。命より大切なものはない。どんな当り前すぎる大層なことを言うか、大人になろうとしていたのかと思うと、一人の教師として、心がしめつけられる。僕はちゃんと君たちに伝えられていたと思う。役所や警察から、ここは危ないからアパートに入居して生活保護を受けるよう勧められても、猫がいるからと、小さな命を守ってもらった猫たちは、今も帰るはずのない三度地さんの帰りを橋の下で待っているそうです。

今もこの前代未聞の危機的状況の中で命を守っている人たちがいる。そしてガマンして、自分の命を守っている人たちがいる。だから未来がある。僕たちはどんな大人になりたいのだろう。何ができることや、足が速いこと。いい学校へ入ったり、いい仕事に就いたりすること。友達がたくさんいること。人から認められること。幸せな家庭を築くこと。望めばキリはない。でもどんな人生を歩くとしても、僕は君たちに、人(他人も自分も)を大切にすることがあったか、大人になって欲しい。僕自身もそうでありたい。その上で自分らしい人生を歩いて欲しい。誰も小さな命をもっていて、それを大切にする義務がある。あらためて、あらためて、もう一度言おう。『命より大切なものはない』んだ。

きみがうちにいてくれたから。
ちゃんと手を洗ってくれたから。
家族を想ってくれたから。
ともだちと支え合ってくれたから。
やさしい気持ちでいてくれたから。
病気の人を助けてくれたから。
みんなのために働いてくれたから。

未来をあらためて
いてくれたから。

だいじょうぶ。
未来は元だよ。

朝日新聞 広告
©ドラえもん
チャンネル



2020.5.5
名も無き
教師の
独り言。